ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイ

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイ

【Ｎコード】
Ｎ７３８６Ｅ

【作者名】
春崎やよい

【あらすじ】
結ばれてはいけない関係の二人。けれど、一目見たときから、お互いに惹かれあっていく。グリフィンドールとスリザリン。対立し合う、二人。けれど、お互い同じ気持ちを持っている。結ばれてからの二人は、以前より仲良しになりつつあう。けれど、周りから二人は分かれたほうが言いと言われてしまう。そんな時、ハリーが取った行動とは・・・？学園ラブでハチャメチャ！！十五歳未満は、禁断の園！甘々だけど、エッチなし！けれど、キスはあります！

プロローグ

魔法学校に入学して、君のことが好きになってしまった。

気持ち悪いと思うだろうけど、そんな彼に夢中なんだ。

大好きの言葉じゃ足りないくらい、一目惚れだったんだ。

ドラコ・マルフォイ、愛しています。

プロローグ（後書き）

最初なので、かなり短いです。
次から本編です！

一章

ホグワーツ行きの電車に乗ったとき、不意に男の子に呼び止められたのが、始まりだった。
彼の名前は、ドラコ・マルフォイ。僕と同い年の男の子。
「一緒に・・・いいかい？」
僕は、慌てて答えた。声が上擦ってしまった。
「いいよ」
彼は、クスクスと笑い出した。なんだよ、笑うことないじゃん。僕は、プクと頬を膨らました。僕の頬を彼は、つんつんと突きだした。
僕は、そんな彼にびっくりしてしまい、声を荒げてしまった。
「何するんだよ！？」
彼は、笑いながら
「ごめん、あまりにも君が可愛く見えたから」
と僕に言ったのだ。その時からだ、彼のことが気になりだしたのはその時、コンパートメントの扉が開いた。開いた扉から、赤毛の男の子が一人入ってきた。
「此処空いてる？」
僕は、ニッコリ笑って答えた。
「うん、空いているよ」
彼は、入ってきた。入るなり、鞄を上に上げた。僕もそれを手伝った。
「ありがとう、助かったよ」
彼は、僕にニッコリと笑って言った。僕も笑い返した。そんなハリーと彼を見ていたドラコは、面白くないといったような顔で二人を見ていた。
「自己紹介がまだだったね。僕は、ロン・ウィーズリー」
「ハリー・ポッター。それで、僕の隣にいるのが、ドラコ・マルフォイ」

ドラコは、ロンにお辞儀だけした。
「ハリー・ポッターって、あのハリー・ポッター?!」
ロンは、声を上げた。びっくりした顔で、ハリーを見つめている。
「『例のあの人』が殺し損ねたって言う・・・」
「ウィーズリー、そんなことも知らなかったのかい?一目見れば、誰でも分かるだろう?」
ドラコは、呆れたという顔をしてロンを見た。そして、視線を隣にいるハリーに戻した。けれど、見ているのは、ハリーの額・稲妻の一点を見ている。
「じゃあ、マルフォイは知っていたのか?」
ロンが怒ったような言い方をした。
「ああ。見たときピンと来たね、この子があの有名なハリー・ポッターだとね」
さっきからドラコにじろじろ見られていてハリーは、心臓の鼓動が早くなっていた。そのことは、マルフォイが知る由もなかった。
ロンは、さっきからハリーの顔が紅いことに気がついた。
「どうしたの?ハリー。顔真っ赤だよ」
「なんでもない。」
どうしてなんだよ、マルフォイが隣にいるだけだってのに。
とうとう、マルフォイもハリーのことが心配になって、ハリーの顔を覗き込んできた。
「本当に大丈夫?顔紅いよ。病気かな?」
眉が真ん中に寄せられている。ハリーは、マルフォイに夢中になってしまい、マルフォイの顔をまじまじと見つめてしまった。
ロンは、目の前の光景を何とかしたかった。けれど、此処でどうすればいいのか、分からなくておろおろしていた。
その時、またコンパートメントの戸が開けられた。そのときやっと、ハリーからマルフォイが離れて、戸口のほうに目を向けた。なんとか、なったなとロンは、思っていた。
戸口に目を向ける、女の子が立っていた。

「ねえ、ヒキガエル見なかった？ネビルっていう男の子が探しているんだけど」
「ヒキガエル？見てないよ」
ロンが言った。ロンは、目の前に座っているハリーとマルフォイに目を向けた。
「「ああ」」
ハリーとマルフォイの声が揃った。
女の子は、二人を見て「仲がいいのね」と言って、コンパートメントから出て行った。
そんな光景にハリーとマルフォイは、首を傾げていた。
ロンも少なからず、女の子が言ったことが本当だなと思い始めていた。

一章（後書き）

こんいちは、春崎やよいです。今日で、二回目の更新です。皆さんにまた会えました。
しょっぱなから、マルフォイ登場になりました。そして、気が着いた方もいたと思いますが・・・ね。（フフ）
評価・感想待っています。お願いします！

二章（前書き）

賢者の石から抜粋していますが、気にしないで下さい。
ハリーとマルフォイがまたもや、イチャイチャしています。苦手な方は、バックできます。

二章

列車が駅に着くと、新入生の一年生は、ハグリットについていった。滑ったり、つまづいたりしながら、細くて険しい小道を、ハグリットに続いて降りていった。右も左も真っ暗だったので、木がうっそうと生い茂っているのだろうとハリーは思っていた。
ハグリットが右に曲がると、大きな湖に出た。向こう岸に高い山がそびえ、そのてっぺんに壮大な城が見えた。
「四人ずつボートに乗って」
ハグリットに言われ、みんなそれぞれペアを組んで岸辺につながれた小船に乗り込んだ。
ハリーとマルフォイが乗り、後からロン、ハーマイオニーが続いて乗った。
小船に乗っていても、ハリーとマルフォイは、ロンたちの目の前でイチャイチャしていた。
「いいわね。仲良くて」
ハーマイオニーは、微笑んで二人を見ていた。ロンもハリーとマルフォイを見ていたが、そんな気分にはならなかった。ロンの心に浮かんできたのは、「嫉妬」と言う、一つの言葉が浮かんできた。
(何さ。ハリーを一人で独占しちゃって)
ロンは、鼻をフンと鳴らした。
ハーマイオニーは、それを見て笑っていた。
小船が岸に着くと、みんなが降り始めた。
ハグリットがヒキガエルの存在に気がついて、ネビルに「これお前さんのか?」と差し出すと、ネビルが「トレバー」と叫んだ。
「絶対に放すんじゃねえぞ」
城影の中にたどり着いた。ハグリットは、大きな握りこぶしを振り上げ、城の扉を三回叩いた。
扉がパッと開いて、エメラルド色のローブを着た背の高い黒髪の魔

女が現れた。ハリーは、咄嗟のことにマルフォイの手を掴んでしまった。マルフォイは、ハリーの手が自分の手に重なっていることに気がついて、顔を赤くした。
「マクゴナガル教授、一年生の皆さんです」
マクゴナガルと呼ばれた魔女は、ハグリットに「ご苦労様」といい、此処からは、私が預かりましょうと言って、一年生を引き連れていった。
玄関ホールを突き抜けて、石畳のホールを横切り、ホールの脇にある空き部屋に一年生を案内した。
ハリーは、まだマルフォイの手を握っていた。マルフォイは、こんな顔を誰にも見られたくなかった。
早く終われと思っていた。
そんなとき、先頭を歩いていた先生がこちらを向いた。
「ホグワーツ入学おめでとう」
マクゴナガル先生は、挨拶をした。そして、ホグワーツでの生活の話をした。話が終わった。
ネビルを見ると、マントの結び目が左耳の下のほうにズレているのに目をやり、ロンの鼻の頭が汚れているのに目を止めた。マルフォイに至っては、顔が赤くなっているのに一番目に付いた。
そりゃ、そうだろう。
同年代のしかも男の子に、手を握り締められて赤くなっているのだ。気がつかないはずがなかった。
マクゴナガル先生は、マルフォイの前に来た。
「あなたどうしたのですか？顔真っ赤ですよ。」
マクゴナガル先生は、マルフォイの体を上から下まで舐めるように見た。そして、右手に目を留めた。マルフォイの隣を見ると、男の子がいた。それを見て、マクゴナガル先生は、その表情で固まってしまった。最初にハーマイオニーが気がついた。
「先生！先生、どうしたんですか？」
「なんともございませんよ。身なりはきちんとしてくださいね。」

そう言って、先生は部屋を出て行った。
「あ、忘れていました。まくなく前後列席の前で組分け儀式が始まります。学校側の準備が出来たら戻ってきますから、静かに待っていなさい」
といい終えて、部屋を出て行った。
ハリーは、やっとマルフォイから手を放した。
「ごめんね、ドラコ。急に手を掴んだりして。びっくりしたでしょ？」
「ああ、まあな。それにしても、気づかれちゃったね、先生に」
「そうだね。」
暫しの沈黙。周りの話し声が聞こえる。その時、ロンがハリーのそばに来た。
「ハリー、マルフォイ。どうしたんだ？」
「「なんでもないよ」」
平然に言った。けれど、ハリーのほうは、声がうわずってしまった。
ロンは、気がついた。
なんともないじゃないよ！明らか、何かあったみたいじゃないか！！
憤怒の形相で、マルフォイをハリーから離した。そして、問い詰めた。
「マルフォイ借りるよ！」
そういって、ハリーから引き放した。
「マルフォイ！ハリーに何したんだよ？」
「何もしてない。」
「何もじゃない！！何かしたんだろう？！ハリーに！！」
みんなに聞こえないくらいの音量で、マルフォイに聞いた。さっきよりも怒っていた。
「ハリーが・・・・、君には関係ない話じゃないのか？」
それを言われてしまい、ロンは、何も言い返せなくなってしまった。
三十秒くらいは、黙っていた。
マルフォイは、痺れを切らして

「もう行くから」
と言って、ロンの前から去っていき、ハリーのところに戻ってきた。
そして、話始めた。
ハーマイオニーは、ロンのところにきて、慰めてあげた。
「大丈夫？」
「ハリー・・・」
ハーマイオニーは、ため息をついた。そして、ロンにアドバイスをしてあげた。
「そんなにハリーと一緒にいたんだったら、マルフォイとも仲良くしたら？そしたら、ハリーも一緒にいてくれるわよ」
ハーマイオニーに言われて、ロンは顔を上げた。
「そうだよね！！よーし、ハリーを奪ってみせる！！」
なんか、違うスイッチが入ってしまったようだ。けれど、ハーマイオニーは、楽しそうにハリーたちを見守ることにした。
恐るべき、ハーマイオニー。

二章（後書き）

はい、こんにちは、春崎やよいです。
もう気づいている方もいると思いますが、この小説は、毎日更新です。評価・感想お願いしますね。

三章

ハリーとマルフォイのところにロンが急いで、やってきた。
「やあ、ハリー。マルフォイ」
ロンは、マルフォイの名前をいやみたらしく言った。
マルフォイは、何かを読み取ったのか、ロンが此処にきたのは、ハリーを俺から掻っ攫うんじゃないかと思い始めた。
その時、部屋の扉が開いた。マクゴナガル先生だ。
「一年生こちらです」
新入生は、部屋を出た。
「一列になってきてください」
そういわれて、ハリーはすぐにマルフォイの後ろに立った。
マルフォイは、ハリーが自分の後ろにいると分かって、心臓が破裂するくらいドキドキしていた。
玄関ホームを横切り、そこから二重扉を通って大広間に入った。
そこは、ハリーが見たこともない世界が広がっていた。天井があるとは思えない。大広間は、天空に向かって開いているように感じられた。
マクゴナガル先生が一年生の前に黙って四本足のスツールを置いたので、ハリーは慌てて視線を戻した。椅子の上には魔法使いのかぶるとんがり帽子が置かれた。この帽子ときたら、つぎはぎの、ぼろぼろで、とても汚らしかった。
此処から何かが始まるのかとハリーは、帽子を見た。広間は水を打ったように静かになった。
帽子がぴくぴくと動き始め、つばのへりの破れ目が、まるで口のように開いて、帽子が歌いだした。
（歌の部分省略）
歌が終わると広間にいた全員が拍車喝采をした。
マクゴナガル先生が長い羊皮紙の巻紙を手にして前に進み出た。

「ＡＢＣ順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組分けを受けてください」
アボットハンナからはじまり、順々に組分けが進んでいった。
マルフォイの名前が呼ばれ、組分けを受けた。
「スリザリン！」
マルフォイは、スリザリンのテーブルに行き座った。
「ムーン」…「ノット」…「パーキンソン」…、双子の「パチル」姉妹…、「パークス・サリー-アン」…、そして、ついに―
「ポッター・ハリー！」
ハリーが前に進み出ると、突然広間中にシーッというささやきが波のように広がった。
みんな口々にハリーの名前をささやきあっていた。
ハリーは、緊張した。マルフォイと同じ組になるのだろうか？けれど、スリザリンじゃないほうがいいのかもしれない。そんなことを考えていたら、グリフィンドールと組分けされた。
そのあとにロンもグリフィンドールと組分けが決定した。
ハリーがグリフィンドールと決まったときのマルフォイの顔ったら、しかめっ面をしていた。ロンとハリーが同じ組と言うのが、気に食わないようだ。
（絶対、ウィーズリーからハリーを死守してみせる）
そうして、ホグワーツでの生活がこうして始まりました。

三章（後書き）

ようやく三章目。こんにちは、春崎やよいです。また会えましたね。朝から書いて朝に投稿。こうしないとやる時間がなかなかみつかりませんからね。学校が始まったら、家帰ってきてからやりますけどね・・・（ハハハ）そんなことは、置いてといて

もう、賢者の石の本がなきゃ、書けないかけない。最初のところを抜粋していかないと、執筆できないんですよ。
評価・感想お待ちしています！お願いします！！

四章

ホグワーツに入学してから一年が経った。その一年では、いろいろなことが起こった。
トロールが牢から脱獄して、ホグワーツを歩き回りハリー、ロン、ハーマイオニーが退治した。
三見頭の犬の下にある扉を伝わって、賢者の石をクィレルから守り壊した。
それだけじゃない、マルフォイがロンにした仕打ち。
マルフォイがロンにやったこととは、ハリーの前で転ばせたりさせた。そのたびに、ハリーがロンに駆け寄って肩を貸して立たせて「大丈夫？」の一言で、マルフォイがどれだけロンを憎むようになったか。
そして、最後にマルフォイがハリーにやっとの思いで、告白をした。
その返事は
「ロンと仲良くしてくれないなら、マルフォイと一緒にいてあげない」の一言だったとか。
見事マルフォイは、その一言で撃沈したとか。
それで、一年は終わった。そして、二年生に上がった。

列車の中で、マルフォイは、ハリーを探していた。
（一体ハリーは、どこにいるんだ？）
一つのコンパートメントの前を通り過ぎようとしたら、そこからハ

リーの声が聞こえてきた。マルフォイは、迷わずに一気にそこのコンパートメントの扉を開けた。
中にいたハリー、ロン、ハーマイオニーは顔を上げた。ハリーは、びっくりして思わず声を上げた。
「マルフォイ！」
マルフォイは、ハリーに呼ばれた、自分の名前の呼び方にびっくりした。だって、ドラコからマルフォイに変わっていたのだから。去年一年は、ドラコだったのに、いつの間にか、マルフォイに変わっている。マルフォイは、少なからずショックを受けた。
「ハリー！またあえて嬉しいよ！！」
マルフォイは、あまりの嬉しさにハリーに抱きつこうとしたが、避けられてしまった。
（そうだよな。）
マルフォイは、考え直した。そして、夏中考えていたことをハリーに告げることにした。
「ずっと、考えていたんだ、ハリーのこと。ハリーが言ったこと分かったよ。ウィーズリーとも仲良くしようと思うから、だから一緒にいて欲しい。ハリーのことが好きなんだ」
ハリーは、いきなりの告白に顔を赤くした。その様子をハーマイオニーは、見ていた。
（ウフフ。可愛いわね）
ロンは、マルフォイの突然の告白に唖然としていた。
（マルフォイもハリーのことを狙っていたなんて。それにハリーは、なんて答えるんだろう）
ロンは、信じがたい現実に目が眩みながら、ハリーとマルフォイを見ていた。
「マル・・・ドラコ。僕も好きだよ、ドラコのこと。でも・・」
「分かっているよ、君が寮のことを気にしているのは・・・。でも、一緒にいて欲しいんだ。ダメかな？」
ハリーは、頭を振った。

ダメじゃない、寧ろ嬉しい。ドラコから告白されたとき、凄く嬉しかった。
でも、ロンと仲良くしてくれるか、不安だったから受け入れられなかっただけなんだ。
ハリーは、自分の心の整理をして、ドラコの告白を受けた。
「うん、ドラコと一緒にいる。どんなことがあっても、一緒にいよう？」
「ハリー！嬉しい」
ドラコは、ハリーを抱きしめた。ハリーも、ドラコの背中に腕を回して抱きしめ返した。
ハーマイオニーは、その光景を面白そうに見ていた。けれど、逆にロンは、撃沈していた。
これからが本当の二人の物語の、始まりであった。

四章（後書き）

四話目です。ここから、やっと話が進む。
質問でも、いいですので、評価・感想など送りください。お願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7386e/

ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイ

2010年10月8日14時25分発行